

# 第1回 茅ヶ崎地区 防災“も”まちづくりワークショップ開催概要

## 1 開催概要

日 時	令和4年11月13日(日) 9:00~12:00
場 所	茅ヶ崎市役所本庁舎4階会議室4, 5
参加者数	約40名

## 2 プログラム

① 開催のあいさつ	茅ヶ崎地区まちぢから協議会 会長 <small>しろた よしゆき</small> 城田 禎行
② ワークショップ趣旨説明	茅ヶ崎市都市部都市政策課 <small>もとおか るり</small> 元岡 瑠梨
③ 基調講演 テーマ「防災“も”まちづくり」	東京大学生産技術研究所 <small>かとう たかあき</small> 加藤 孝明 教授
④ 災害時の被害想定 / 災害をイメージする	NPO法人 日本都市計画家協会 <small>かみや ひでみ</small> 神谷 秀美
⑤ ワーク・ディスカッション / 地域防災力を強化	
⑥ 発表	
⑦ 閉会のあいさつ	茅ヶ崎地区まちぢから協議会 副会長 <small>こしかわ よしお</small> 越川 善雄
⑧ 次回の確認	

## 3 ワークショップ内容

### ◆開催のあいさつ

茅ヶ崎市では、市内13地区のまちぢから協議会もしくは自治会連合会に対し、年に1地区ずつ、防災“も”まちづくりワークショップを実施しています。

茅ヶ崎地区では、まだ、このワークショップが開催されていないことを知り、是非、実施したいと思っていました。

この機会を活かして、みんなで茅ヶ崎地区のまちづくりを考える機会にしたいと思います。



茅ヶ崎地区まちぢから協議会  
会長 しろた よしゆき 城田 禎行 氏

## ◆基調講演 「防災“も”まちづくり」とは？

### ●講演内容

1. 最近の災害を振り返る
2. 地域から始める「防災“も”まちづくり」がなぜ必要か？
3. 地域から始める「防災“も”まちづくり」の取り組み方
4. 外してはならない3つのツボ
5. 「防災“も”まちづくり」とは？



東京大学生産技術研究所  
かとう たかあき  
加藤 孝明 教授

### ●最近の災害を振り返る

地震時に、度々ブロック塀の倒壊による被害が起こりますが、これは過去の災害の経験が継承されていないことを示しており、大きな課題です。

近年の気候変動により、台風の数が少なくなるという傾向がある一方で、1つ1つの台風の規模が大きくなり、被害も拡大する傾向があるようです。

数年前に糸魚川市の市街地で大規模な延焼火災がありましたが、この火災により消失した面積は約3万㎡でした。茅ヶ崎市の延焼クラスターの面積は、糸魚川の面積よりも何倍も広いことから、火災・延焼に注意し、防災活動に取り組むことが求められます。

### ●地域から始める「防災“も”まちづくり」がなぜ必要か？

行政の業務が多様化し、縦割り構造の中で、ボトルネック化し対応しきれなくなっています。細くなった隙間を埋めるためには、共助という視点が必要で、例えば、商店街が防災や福祉に取り組む等、様々取り組みを掛け合わせ多目的化することが必要です。

行政だけを頼りにするのではなく、地域から活動を始め、そのあとに行政が支援するといった形が、理想だと思えます。

### ●地域から始める「防災“も”まちづくり」の取り組み方

行政が行うまちづくりは、エンジニアリング的であり、料理で言えば、レシピをもとに器具や食材を揃えて、決まった料理をつくる「急に料理に目覚めたお父さん方式」です。一方で、地域が主体となるまちづくりでは、夕方、冷蔵庫の中を覗き、ある食材でおいしい料理をつくる「夕方のお母さん方式（ブリコラージュ）」という視点が必要です。地域から始める「防災“も”まちづくり」の取り組み方としては、地域にある資源や人材を上手に活用して、工夫しながら、防災に取り組むことが重要です。

### ●外してはならない3つのツボ

- ①災害リスクを確実に理解する
- ②自助・公助・共助のあるべき姿  
(あるべき姿を共有し、地域と行政が建設的な議論の場を創出すること)
- ③総合性(防災だけではなく総合的に地域課題を考える)  
内発性(自分達でやるべき・やりたいと思う機運を高めること)  
自律発展性(やりながら内容が膨らんでいくこと)

### ●「防災“も”まちづくり」とは？

- ①防災「だけ」でなく、防災「も」。日ごろの活動の中に防災を埋め込む工夫が必要。
- ②1回やって終わりではなく、持続性を高める(負担感を低減する)。
- ③前向きな力を引き出す。

### ●こんなことが「防災“も”まちづくり」

秋田県男鹿市の伝統文化である「なまはげ」は、地区の未婚の男性が「なまはげ」に扮し、家々を巡って厄払いをしたり、怠け者を諭したりするものですが、実は、年に1回、各家庭の暮らしぶりや子供や高齢者の状況を確認する機会になっています。これはまさに、現在でいう避難行動要支援者の情報を集めることと同じことです。このように、「防災」を意識しなくても自然に災害時の備えができています。このような取り組みが「防災“も”まちづくり」の典型と言えます。

茅ヶ崎地区でもこの機会に、「防災“も”まちづくり」に取り組んでいただきたい。

### ◆災害時の被害想定

日本都市計画家協会理事の神谷秀美氏が、茅ヶ崎市のハザードマップの情報を活用して、延焼火災、建物の倒壊、液状化、水害等の茅ヶ崎地区で起こりうる災害について説明をしました。

また、これまでの災害の事例から、どのような被害状況が考えられるかを説明しました。

その上で、茅ヶ崎地区内は、地区内でも懸念される被害が異なること、また、茅ヶ崎地区は周辺に比べて、比較的被害が少ない反面、他の地区と異なり、帰宅困難者や、特に被害が大きいJR東海道本線の南側の住民が茅ヶ崎地区に逃げてくることも考えられ、地域の防災を考える上で、このようなこともイメージする必要があることが説明されました。

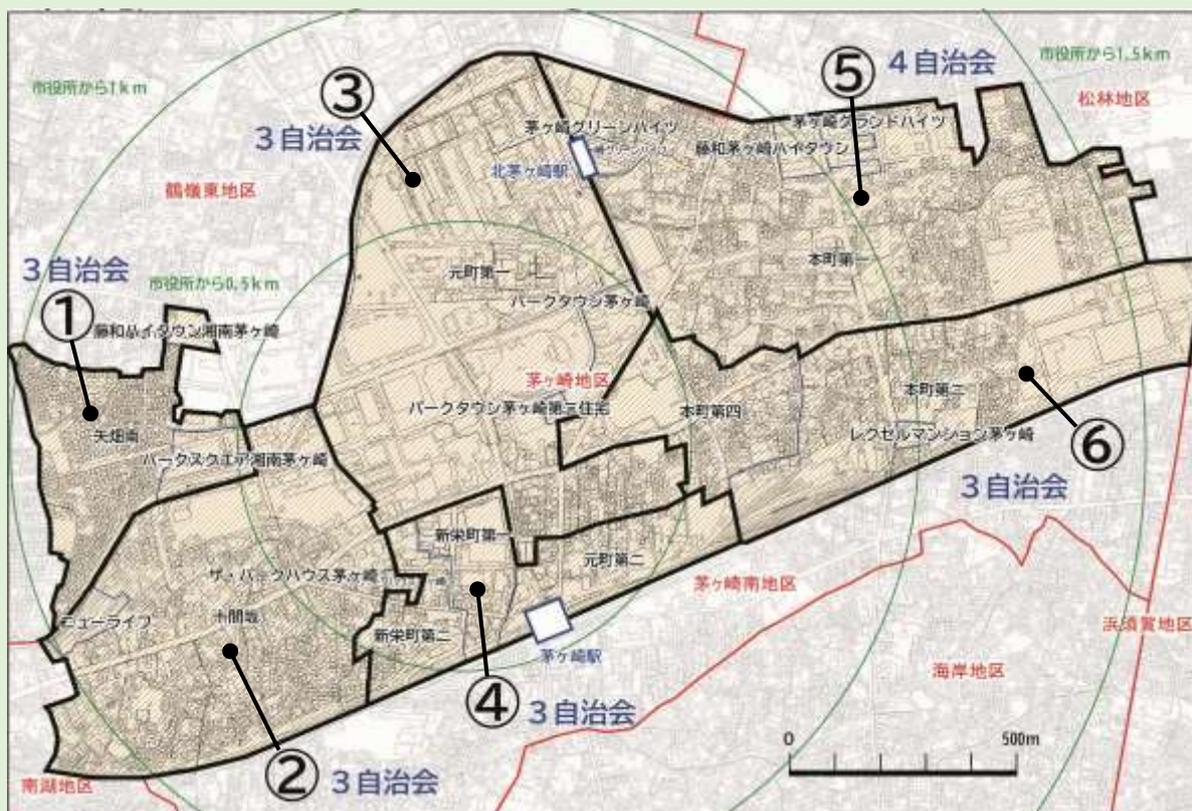


NPO法人 日本都市計画家協会  
かみや ひでみ  
神谷 秀美 氏

## ◆ワーク・ディスカッション

茅ヶ崎地区を6つの区域に区分し、6つのグループを構成しました。

グループごとに、ファシリテータ進行のもと、日常のコミュニティ活動や防災活動の中から、地域の防災力強化に繋がる取り組みを整理しました。加えて、活動の課題、工夫点、そして、次回のまちあるきの際に点検すべき地点について意見をまとめました。



グループ区分



※グループごとにとりまとめた内容は別紙で整理しています。

## ◆発表

### [グループ①]

自治会の加入率が約30%と低いマンションがあります。また、自治会内で温度差があるため、自治会の運営が難しい状況です。

まちづくり、防災の体制づくりが課題です。

防災備蓄倉庫が4カ所と飽和状態であり、今後のあり方を検討する必要があります。



### 加藤教授との意見交換

自治会加入率が9割を超えるマンションもあれば、加入率の低いマンションもあるということで、自治会以外の様々な活動の中で、マンション居住者との繋がりを持つ工夫が必要かもしれません。

### [グループ②]

祭りや体育祭により、地域コミュニティが活発な地域ですが、新住民との連携が難しく、今後、横の連携を進めていきたいと思えます。

国道1号を挟んで、南側の地域は、狭い道路が多く、延焼火災が課題となっている一方で、北側の地域は、延焼火災の心配よりも、浸水が懸念されます。



### 加藤教授との意見交換

ハザードマップで地域の危険性について確認することも大切ですが、延焼火災については、JR東海道本線の南側で広く延焼する可能性があります。その場合、南側からこの地域へ避難してくる方が多くいると思います。自分たちの避難のこともありますが、想定されている被害を広い目で見、災害時をイメージすることが大切です。

### [グループ③]

戸建て住宅は横の繋がりが薄く、コミュニティ形成が課題となっています。

また、防災訓練を実施しても高齢者が中心となるなど、住民の参加意識の醸成が課題となっています。

地域内は飲食店が多く、まちあるきのポイントとしては、北側の工場は避けて、南側の住宅地等を確認したいと考えています。



#### [グループ④]

茅ヶ崎駅に近いエリアで、商店街と連携できる可能性がある一方、課題でもあります。また、災害時に若者の人手があると良いので、高校生などとの連携ができるのではないかと。さらには、医師との連携も重要と考えられます。日常生活において、これらの人との関わりを増やしながら、災害時に連携できるようにしておくことが必要です。

また、子どもイベントを重視して、子どもの見守りや、地域に根ざす若者との関係づくりをしていくことが考えられます。



#### 加藤教授との意見交換

いざとなったときに連携する人材と、事前に体制づくりを進めておくことは、とても重要だと思います。茅ヶ崎地区は、住人だけでなく、茅ヶ崎駅を中心に様々な方が活動しているので、その方たちと連携していくことが有効だと思います。

#### [グループ⑤]

以前は、夏祭りを実施していたが、人手不足により廃止となり、その他の活動もコロナ禍で中止しているものが多いです。

災害時、マンション住民は避難せず、自宅避難で対応することとしています。その際に、支援物資はどのような扱いになるのか確認していきたいと思います。

祭りのときに発電機を利用することやテントを設営することが、防災訓練にもなっており、災害時の活動につながる効果があると思います。



#### [グループ⑥]

コロナ禍で、実施できなかったコミュニティ活動を再開したいと考えています。一斉清掃などを通じて、住民間のコミュニケーションを活性化していきたいと思います。

まちあるきでは、JR東海道本線の地下道を点検したいと思います。

また、カエル公園の用水路を確認したいと思います。今回はみることができませんが、TOTOの工場が広域避難場所になっているので、まちの資源として考えています。



### ○加藤孝明教授の全体講評

茅ヶ崎地区はマンションが多いので、マンション居住者を含めた体制づくりが重要になります。

また、この地区には、多様な資源があり、特に人資源については、商業者、企業、医者、若者などとの関係づくりや、さらなる資源発掘の可能性があると思います。

コロナ禍でイベントができていないといった課題があげられましたが、コロナ禍がプラスにも働く可能性が考えられます。

例えば、リモートワークが増え、日中、茅ヶ崎地区内で過ごす、働き盛り男性が増えています。この人たちが、災害時に活躍してもらうことが期待できることや、改めて、お父さんの目で地域を見てみると、まちづくりを進めるきっかけが生まれるのではないかと思います。視点を変えれば、様々な工夫ができると思います。

最後に、災害を減らす視点も重要ですが、地域が主体になるまちづくりでは、いかに難しく災害を乗り越えるかが重要になります。普段からの人付き合いや、何をすべきかについて焦点を当て、今回のワークショップ内で議論していきたいと思います。



### ◆閉会のあいさつ

本日のワークショップは、内容が濃く、消化不良で時間不足に感じるほど、参加者の皆様から多くの意見をいただきました。これは、第1回のワークショップとしては、成功と言えるのではないかと思います。

3回のワークショップを通じて生まれた成果が、次年度以降の活動に良いかたちで繋がるようにしていきたいと思います。



茅ヶ崎地区まちぢから協議会  
副会長 こしかわ よしお 越川 善雄 氏